

アクティブラーニングを取り入れた授業

—外国人留学生と日本人学生混在の授業での試行—

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi

徳島大学国際センター

坂田 浩

SAKATA, Hiroshi

徳島大学国際センター

要旨：単に教師の講義を聞くような受動的な学びではなく、学習者が主体的に、能動的に学習できるようにするため、「アクティブラーニング」の手法を取り入れた授業を展開した。外国人留学生、日本人学生、社会人がともに、地元の文化を学び同時に異文化理解を深めることを目的としたグループ学習と実地旅行を中心にした授業を行った。実体験に基づいた地元文化の学習や異なる背景の人とのコミュニケーション体験に、学習者からは好意的な反応が得られた。

キーワード：アクティブラーニング、能動的学び、異文化理解、スタディツアー

1. はじめに

高校までの教育と大学での教育との大きな違いは、知識獲得に重点を置くか、知識習得に至る過程を含めた問題解決の学習に重点を置くかということである。高校までの授業では、教師が学生に必要だと思われる知識を教え、学生はそれを正しく覚えることが求められる。学習の評価は知識が正しく記憶されているかが問われ、問題に対する一つだけの正解が用意されて、それを導き出すことが学習目標になる。大学入試センター試験のように、正しいとされる解答に最終的にたどりつかなければ、優秀な成績を収めることはできない。

大学に入ると一転、一つだけの答えを導き出すことを求める学習方法ではなく、「自分で考え」「自ら行動する」学習が求められる。単に知識を得るだけではなく、そこから自分なりの課題や問題を見つけたり、意見や考えをまとめたり、問題を解決する方法を考えたり、それを実践したり、過去の文献から新たな考えを創造したりするように促される。つまり、それまでは教科書や教師が提示する「正しい知識」「正しい答え」を「記憶」するために頭を使っていたが、大学では知識や情報を得たのちにそれを材料に過去の知識と関連付け、新たな知識をどう活用できるのかを「考える」ために頭を使わなければならない。

大学ではそうするのが当たり前だ、と片付けるのは容易である。しかし、本当に学生たちは大学に入学して、このような新しい「学び方」を理解し、自分を合わせているのかは疑問である。また、大学教員が積極的に学習方法、学習スタイルの転換を学生に説明し、指導しているとも思えない。短大や専門学校を含めた高等教育機関への進学率は76.8%（平成20年）となり、大学と短大の収容力は92%（平成20年）

で、まさに「大学全入時代」である（平成20年第5回教育再生懇談会資料）。教育背景や学力が多彩な学生が大学に入学してくる状況に加えて、急激に社会環境も変化しており、大学には大学の目的にあった教育方法をわかりやすく効果的に学生に示していくことが求められるはずだ。

最近では、暗記型の学習ではなく、自ら考えて知識を活用できるような学習方法の一つとして、「アクティブラーニング」が大学の授業にも採用されている。本稿では、この「アクティブラーニング」の概要と、その方法の一部を取り入れた授業について解説する。

2. アクティブラーニングとは

これまでの講義中心の、学生にとっては聞く授業、つまり受動的な教授法に対して、学生がアクティブに、つまり実際に活動して能動的に学習の取り組むものがアクティブラーニングである。なぜ講義を聞くだけでは学習が不十分なのかを具体的に示しているのは、アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）によって考えられた「ラーニングピラミッド」である。学習定着率つまり学習効果が低い（ピラミッドの一番高層階）のは講義を受ける（Lecture）5%で、順に、読む（Reading）10%、視聴する（Audiovisual）20%、実演してもらおう（Demonstration）30%、議論する（Group Discussion）50%、活動や体験をする（Doing Practice）75%、他者に教える（Teaching Others）90%となっている。学生が受け身になりがちな講義形式の座学の学習よりも、より能動的な議論や体験、他者に教えるといった活動を取り入れることで、知識の定着率が高くなり学習効果が上がるとされている。

ラーニングピラミッドの下層階の活動を取

り入れたものがアクティブラーニングである。教室でのアクティブラーニングの定義は様々あるが、Bonwell&Eison (1991) による定義は次のようになっている（英語原文の日本語訳は本稿著者）。

- ・ 学習者は聞くことよりも必然的に巻き込まれる
- ・ 情報の伝達に重きを置くことを少なくし、学習者のスキルの向上により重きを置く
- ・ 学習者はより高位な思考（分析、統合、評価）と関係付けられる
- ・ 学習者は活動（読解、ディスカッション、ライティング）にかかわる
- ・ 学習者自身の態度や価値観を学習者が説明することに、より重きを置く（p. 2）

上記の要素を大学の授業に取り入れることを考えて、Bonwell&Eison はアクティブラーニングを「何かしたりしていることについて考えることにおいて、学習者を巻き込むあらゆるもの（anything that “involves students in doing things and thinking about the things they are doing” 本稿著者訳）」であると述べている。

一方的な講義による情報伝達型の授業では学習者は聞く作業が中心で受動的な学習にとどまるが、書いたり話したりといった能動的な活動を通して学習者の認知機能を活性化させる、つまり「頭を動かす」ような教授法をアクティブラーニングと定義する場合もある。溝上（2015）は、学習者にとって受動的な教授パラダイムから能動的な学習パラダイムへの転換と認知プロセスの外化に注意を向け、アクティブラーニングを次のように定義している。

一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。（p. 32）

講義を聞くことでも認知プロセスは働き、学習者は自分なりに情報を処理して記憶にとどめる作業をする。しかし、聞くことだけではなく、書いたり読んだり話したりすることで認知プロセス、つまり記憶や言語や思考といった頭の中で行われる情報処理を「外化」させることができる。このためにアクティブラーニングを大学の授業に取り入れることが必要なのだと述べている。

愛媛大学教育・学生支援機構の教育企画室が

行ったFDセミナー「アクティブ・ラーニング入門セミナー」（2014）では、学習アプローチの類型が示され、縦軸に「活動性の高～低」が、横軸には「学習の深さ～浅さ」があり（図1）、学習アプローチが4領域に分けられることが指摘された。

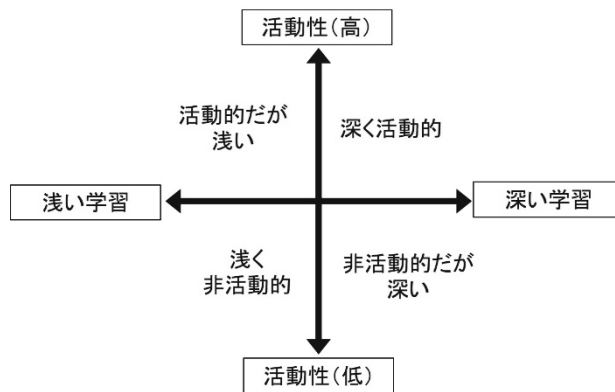


図1 学習アプローチの類型（愛媛大学 2014）

「浅い学習で活動性が低い」領域では、暗記型の学習が目標になり、授業も知識伝達型の一方通行のものである。「浅い学習で活動性が高い」領域では、アクティブな方法、例えば読解、討論、プレゼンなどの活動が採用されるものの、知識そのものとの接続が少なく、学習者が単に受け入れた情報をアウトプットするような、主体的な関わりは見られない。「深い学習で活動性が低い」領域では、活動は知識伝達型に近いが、学習者の主体性を伸ばし学習内容の概念と論理を理解させることができる。「深い学習で活動性が高い」領域では、意味の探究を行う内容と活動が連動している。

純粋なアクティブラーニングを行うとすれば、「深く活動的」な領域にあてはまるような授業を行うことになる。しかし、取り扱う内容がすべてこの領域で行えるわけではない。また、学習者の教育的背景にも対応していかなければならない。「浅く非活動的」な学習に慣れている高校を卒業したばかりの学習者に、単純に「深く活動的」な授業を展開しても、効率的な学習が進むとは限らない。それで、教師側がいかに学習の質を高め、学習者が自発的に学習に関与できるように授業を作るかが大切だと思われる。そのことを念頭に置きつつ、上記の4領域にあてはまる授業形態を巧みに使用して授業を組み立てることが必要である。

具体的なアクティブラーニングの方法のいくつかは次のようなものである。いずれかを組み合わせることによって、より効果的なクラス運営を図ることができる。

- ・ 講義法
- ・ クリッカー（学習者の意思を表示する）
- ・ ミニッツ・ペーパー（授業のポイント、疑問、理解度などを数分で記入）
- ・ 授業新聞（他の学生のコメントを読む）
- ・ 質問法
- ・ バズ・セッション（グループで話し合ってから、全体討論して結論をまとめる）
- ・ Think, Pair & Share（一人で考えてから、隣に話し、さらに全体で共有する）
- ・ ペア・リーディング（ペアで別の読解をしてから、要約を相手に伝える）
- ・ ジグゾー法（断片的な情報をグループでまとめる）
- ・ マインド・マップ
- ・ ディスカッション・ディベート
- ・ ポスター・セッション
- ・ Project-Based Learning
- ・ Problem-Based Learning
- ・ ワークショップ
- ・ブレイン・ストーミング
- ・ KJ法
- ・ ロール・プレイング
- ・ サービス・ラーニング（学習と地域社会の課題解決のために活動をする）
- ・ 逆転授業（講義型授業を授業時間外に行い、授業は討論やプロジェクトを行う）
- ・ チーム・ティーチング（複数教員で教える）
- ・ e-ラーニング

学習者を主体的な学びの中心に置き、能動的に学習に関与させるために、また学習の動機づけを持続させるために、上記のようなアクティブラーニングの手法を取り入れることは有効であると思われる。一方で、ただ活動を行っただけで、「やりっぱなし」になってしまうと、学習者が「楽しかった」「おもしろかった」で終わってしまう可能性もある。新しい知識と既存の（頭の中にある）知識を結び付け、いかに学習者が自分自身を学習に関連付けさせるかも重要である。

Fink（2013）は「意義深い学習経験（Significant Learning Experience）」には学習者が関与する（engaged）必要があると述べている。学習者は「知の能動的な建設者、探究者、そして転換者（active constructor, discoverer, transformer of knowledge）」でなければならない。さらに、Finkは「意義深い学習体験」を教師が提供するためには、図2のように総合的なアクティブラーニングの3つ

の要素それぞれを、直接的あるいは間接的にかかわり合わせる必要があると述べている。

ここで注目したい点は、「内省」が含まれていることである。新しい情報を学んだとき、それにはどんな意味があり、どう学んだのか、他者とどんなかかわりがあったのかを振り返る必要がある。そうすることで、今学習したこと、また学習方法をほかの分野にも応用することができると考えられる。

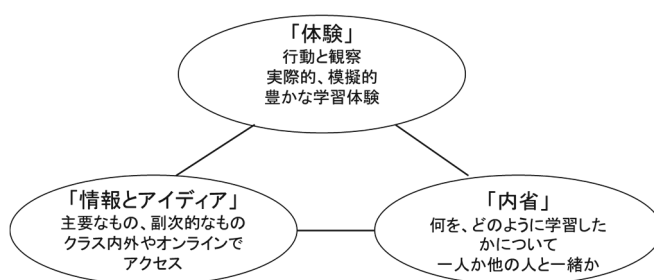


図2 「意義深い学習経験」のための
アクティブラーニング
(Fink 2013 本稿筆者訳)

3. アクティブラーニングの実践例

このようなアクティブラーニングの方法を実際の大学の授業で取り入れる試みとして、徳島大学全学共通教育の2014年度後期に開講された、「国際交流の扉を拓く」という授業で用いた。この授業は、共通教育を履修する日本人学生や外国人学部学生、また外国人交換留学生が履修登録でき、社会人にも受講を認めている（「共創型科目」として登録されている）。この授業の履修学生の内訳は、日本人学生6名（医学部、総合科学部）、外国人学生9名（中国、台湾、スウェーデン）、社会人1名であった。

授業タイトルにあるように、日本人学生と外国人留学生がともに学ぶことで、日本人学生にとっては国際交流のきっかけとなり、異文化体験を実感させることを目的としている。また、外国人留学生にとっては、日本人を知る機会となり、授業のコンテンツでもある日本や地元徳島の文化を学ぶ機会となる。社会人も加わることで、クラスの中の異文化がよりダイナミックになり、いろいろな視点での考え方を見つけることができると考えた。授業オリエンテーションで渡したシラバスには、授業の目的を次のように記した。

「グローバル」な人とは、単に多言語が話せる人のことではない。異なった文化や人々を理解できると同時に、自分の文化や言語をしっかりと理解し、それを巧みに発信できる人のことである。この授業では、日本人学生、外国人留学生、地域の人たちと共に学ぶことで、異なった背景を持つ他者をよく知ると同時に、自分自身の文化や言語にも目を向ける。徳島の文化を学び、情報を発信する。また授業終了後にも自分で学べる力を身に付け、国際交流に参加する方法を考える。(授業シラバス)



Unit2 藍染め体験

主な授業の内容は、徳島の文化を調べ、その情報をまとめ、レポートにまとめたり発表したりすることである。アクティブラーニングの手法を取り入れたため、徳島の文化について教師が講義形式で教えることはしなかった。すべての活動で日本人学生、外国人留学生、そして社会人がグループとなり、授業時間内外で自分たちで調べ、分かったことをまとめ、レポートにまとめたり口頭で発表する形式をとった。

授業は大きく3つのユニットに分けた。Unit 1と2はスタディ・ツアーで行く場所を事前に調べてレポートにまとめ、実際にその場所に行って写真を撮り、調べたことを実体験して感想を加えてレポートを書かせた。Unit 3では口頭発表をし、最終レポートを提出させた。

Unit1: スタディ・ツアー1

平家屋敷民俗資料館
祖谷いやかずら橋おおほけこぼけ (大歩危小歩危)

Unit2: スタディ・ツアー2

大塚食品工場
大塚製薬 (能力開発研究所)
霊山寺 (四国遍路第1札所)
藍の館 (藍染め体験)

Unit3: 口頭発表



Unit1 平家屋敷民俗資料館

Unit1 では、授業履修者以外の人たちもスタディ・ツアーに同行したため、授業履修者がガイド役となり、自分たちの調べたことをもとにガイドしてもらった。あまり日本語が話せない人もいたため、ガイド役の授業履修者には日本語と英語でガイドするように指示した。

日本人学生、外国人学生、社会人の混成グループ分け (各グループ4名) は教師側がして、4グループがすべてスタディ・ツアーで訪れる場所について自分たちで調べ、一つのレポートにまとめるように指示した。Unit 1、2、3では、なるべく同じ人とグループにならないようにし、クラスの全員と活動できるように工夫した。レポートの長さ、文献の引用の仕方やリストの書き方などは指示したが、分担や文献の調べ方などはグループに任せた。グループで調査する際には、教室で話し合っても、図書館に行ったり個人で調べて後から集まってまとめたりしてもいいことにした (教師は質問を受けるために教室に待機した)。基本的にはインターネットで調べることが中心になるため、調べる内容が浅くなる可能性もあった。しかし、今回はコンテンツそのものよりも、学生たちが自分で考え、調べ、時間を管理し、情報をまとめ、レポートに書く、という作業に重点を置いた。また、外国人留学生の中にはほとんど日本語ができない学生もおり、日本人学生にとっても日本語があまりできない学生にとっても、言語の壁を実際に体験し、その中でも助け合って課題に取り組むことを期待した。

Unit 1と2では、スタディ・ツアーに行く前に調査し、調べたことをまとめたレポートを日本語で出させ、スタディ・ツアー終了後にも再度レポートを提出させた。終了後のレポートには、実際に行って感じたこと、学んだこと、そしてグループで行ったことについての感想 (内省) を書くように指示した。そうすることで、他者、とりわけ異文化の背景を持つ人たちとの

接触から、何を、どのように学び考えたかを自分の中で明確にさせようと考えた。

Unit 3では、新たにグループ分けをし、4つのグループごとに一つの場所を選び、その場所に対する事前調査内容、実地での調査内容、グループ内の様々な背景を持つ人との活動で気がついたこと（よかったことや難しかったこと）、この授業で経験したことをもとに今後してみたいことなどを口頭発表させた。また、その発表原稿を整理し、最終レポートとして提出させた。

以上のように授業を組み立て、Fink (2013)の提唱している「情報とアイデア」「体験」「内省」の3つの要素が組み合わされるように工夫し、グループ学習やPBLといったアクティブラーニングの具体的方法も取り入れ、大学の授業でのアクティブラーニングの試みを行った。

4. 学生の反応

Unit 3で出された学生の反応を見ると、様々な文化的また言語的背景を持つ人たちと、困難を感じながらもその違いに気づき、グループとしての学習を楽しんだ様子が分かる。他者を理解することに加えて、日本人学生にとっては自分の国や文化を再確認する機会にもなったようだ。

以下は、Unit 3の最終レポートからの一部抜粋である。文は提出されたレポートのままである（日本語能力の差があるため不自然な日本語もあるが、そのまま記載する）。

一緒に調査してよかったこと

- ・ グループ work を通じて、いろいろな話をして、違う国の事がわかってきた。例えば、文化や習慣などの問題とか、言語を勉強する文句などである。グループ work のため、昔知らなかったことも少しわかった。
- ・ 普段接する機会をもたない留学生と話したり意見を交換することは新鮮だった。留学生に日本のことを聞かれたときうまく説明できない自分がいて自国のことも知らないのだなと気づかされた。
- ・ 日本の大学生は外国の人と交流する機会があまりないらしい。先生が今回のグループワークでその機会を作ってくれたことに感謝している。
- ・ ある出来事に対して、人々の反応あるいは考え方は違う。そういったことによって、私たちは自分と他の人の違いに気付いた。そして、物事はいろいろな角度か

ら考えられるということもわかった。それは、ある程度で、私たちの思想を広げる。

一緒に調査して難しかったこと

- ・ 班員と協力することの難しさを感じた。言語の壁はもちろん、日本人同士でも思っていることが伝わらないこともあり悪戦苦闘した。けど、いろいろな人と交流できて勉強になった。
- ・ 時間感覚の違いを文化の違いとして実感した。
- ・ グループのメンバー同士では、十分に交流できなかったのも残念だった。
- ・ いろいろな背景の人と一緒に調査して難しかった点は、第一に、日本語でコミュニケーションをとるということだ。留学生のレポートを日本人が推敲や訂正をする際に助詞の使い方や言葉の意味をうまく伝えることも難しかった。

今後したいこと、したくないこと

- ・ グループと一緒にレポートやプレゼンテーションをしたいということである。グループの中で私たちはお互いを助けられることができる。私たちはお互いを鼓舞することができる。たくさんアイデアを持ちよって、お互いから学ぶことができる。
- ・ 前はチームワークと言えば、一人一人が作業を分担するというイメージがあった。しかし、今回は個別行動ではなく、グループのメンバー同士でたくさん話し合った。個別行動も話し合いも、両方ともいい方法だと思う。
- ・ 今回の実地旅行は、行く前にあらかじめ資料を調べておき、帰った後は感想文を書いた。それで、自分が勉強になったと思うことがはっきりさせられた。今後旅行に行くときも、事前に資料を調べたり、事後感想を書いたりしたい。
- ・ この授業を通して、もっと海外の人、異文化の人と関わってみたいという思いが強くなった。留学生と日本人の学生が一体となつてのレポート作成などを経て、お互いのバックグラウンドが違えば、注目する点や参考にする資料の集め方が違ったりして、普段は気づかないような発見が沢山あった。

徳島・日本の文化や異文化理解を、教室で教師が講義をすることが必要な場合もある。一方

で、今回のようなアクティブラーニングを取り入れ、地元の文化にじかに接し、言語の違いを含めた異文化を実体験し、普段の授業とは異なるものを学習する機会を提供することも効果的であると考え。日本人学生の反応の中には、さらに外国人留学生と交流したい、海外に留学したいという声もあり、この授業が国際交流の意識を高めることができ、効果的な授業が展開できたと思われる。

5. 今後の課題

アクティブラーニングの手法を一つの授業に取り入れて、どのように実際に行えるのか、学生からはどんな反応があるのかを見るために試行した。全体としては、グループワークは効果的に行われ、事前調査と実地調査の組み合わせも学生たちには新鮮だったようだ。また、グループワークから学んでほしいと思っていたことも、学生たちの反応を見ると予想通り学習されていたと思われ、この授業におけるアクティブラーニングは効果的なものだったと考える。

一方、いくつかの問題も浮かび上がった。コンテンツとして選んだ「徳島・日本の文化」について言えば、学生たちの調査のいくつかは十分なものではなかった。コンテンツの理解に関していえば、図 1 で示した「活動的だが浅い」学習アプローチの領域になってしまった。講義型にすれば、教師の教えた内容が伝達されるが（とはいえ、それが学習者に理解・記憶されるとは限らないが）、グループ学習ではコンテンツの内容がどの程度理解され、学習が深められたのか確証が得られにくい。今回はレポート、プレゼンといったアウトプットにより評価を行ったが、アクティブラーニングでどの部分の学びが深まったのか、学習が進んだのか、あるいは進まなかったのかを、しっかり検証する必要があると思われる。

学生からの感想にもあったが、日本人学生と外国人学生との混成授業では言語の問題が大きかった。外国人学生の日本語が日本人とアカデミックなレベルでコミュニケーションが取れるレベルではなかったり、そのような学生が英語で話そうとしても日本人学生の英語のレベルが不十分だったり、言葉の壁の問題は大きかった。この授業では異文化理解の過程でこの「言語の壁」を体験させることも目標の一つではあったが、実際の活動を行う際にはそれは障害になる。言語とそれを使ったコミュニケーションの問題は、解決すべき大きな課題となった。

今回の授業では2回スタディツアー（実地旅行）を行うことができた。外部資金が得られたためである。しかし、いつでも外部資金が獲得できるわけではない。教室内外での「体験」を含むアクティブラーニングを、通常の授業でもどのように行えるのか引き続き検討していきたい。

参考文献

- 愛媛大学教育・学生支援機構の教育企画室
(2014) FD セミナー「アクティブ・ラーニング入門セミナー」(2014) 配布資料
「大学全入時代の教育の在り方について」
(2008) 第 5 回教育再生懇談会
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku_kondan/kaisai/dai5/siryou5.pdf
- 橋本智・坂田浩・金成海 (2014) 「国際交流の扉を拓く」授業シラバス
- 溝上慎一 (2014) 「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂
- 溝上慎一 (2015) 「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を進化させるために』松下佳代編 勁草書房
- Bonwell C.C & Elison J.A. (1991) *Active Learning: Creating Excitement in the Classroom*. Washington, DC: Clearinghouse on Higher Education, The George Washington University.
- Fink, L.D. (2013) *Creating Significant Learning Experiences, revised and updated*. San Francisco: Josseybass.